

mizuki

みずき
第16号



大阪医科大学附属病院 病院医療相談部 医療連携室ニュース ● 2010年7月発行

contents

- 新任部長のご挨拶 P.1
- 病院長就任のご挨拶 P.2
- 新任のご挨拶 P.3
「耳鼻咽喉科、一般・乳腺・内分泌外科、循環器内科」
- 診療科の紹介「婦人科・腫瘍科」 P.4
- 診療科の紹介「産科・内分泌科」 P.5
- 医療連携室から P.6
- 編集後記 P.6

新任部長のご挨拶

このたび、4月1日付で病院医療相談部部長に樋口和秀が就任いたしました。



病院医療相談部部長
樋口 和秀

暑い毎日が続きますが、皆様におかれましては、益々ご清祥のことと存じます。いつも大阪医科大学附属病院病院医療相談部をご支援賜りまして、厚く御礼申し上げます。木下前部長（現院長）より引き継ぎ、樋口和秀が後任として本年4月1日より病院医療相談部を担当させていただいております。引き続きご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

昨年は、新型インフルエンザが、北摂地域で猛威をふるいましたが、北摂地域の医療連携により、どうにか乗り切ることができました。これもひとえに皆様方のご協力の賜物と感謝すると同時に、新規感染症に対する緊急対策のよい経験になりました。また、相変わらず医療を取り巻く環境は厳しく、医師不足に加え、働く医師の科の偏在がさらにあらわになり、大阪も一部では医療崩壊に陥っているといっても過言ではありません。今後迎える超高齢化社会において、上質の医療の提供を目指し、そのために必要な病診連携をさらに円滑に運営できるようにお互いの施設がより深くコミュニケーションをとり、情報交換をしていかなければなりません。皆様方のお役に立てますようスタッフ一同努力してまいりますので、今後ともみずきをご愛顧いただけますようお願い申し上げます。



病院長就任のご挨拶

大阪医科大学附属病院
病院長

木下 光雄

緑の木陰の慕わしい今日この頃、皆さまにおかれましてはご清祥にお越しのことと拝察いたします。日頃から当院に対しまして種々御指導を賜り、心より感謝申し上げます。

さて私こと、平成22年4月1日付けで大阪医科大学附属病院病院長に就任しました。この紙面をお借りして、ご挨拶を申し上げます。

今年度、本学には看護学部が開設され、医学部医学科と看護学部看護学科の2学部の医科大学として新たな門出を迎えました。また、本年4月1日には植木 實先生が法人新理事長に就任され、これを機会に、新理事長と竹中 洋学長との共同ステートメントが発表されました。本院は地域に根ざした特定機能病院として「社会のニーズに応える安全で質の高い医療を皆さまに提供するとともに良識ある人間性豊かな医療人を育成します」を理念にかかげています。この理念のもと、共同ステートメントには附属病院のあるべき方向性が示され、医育機関としての将来を見据えた在り方、患者さまのニーズに適切に対応できるソフト・ハード両面でのさらなる改善が課題としてあげられています。

具体的には、患者さまに安心して治療を受けていただけるよう、診療部門のみならず「医療安全推進部」や「感染対策室」などの機能もさらに充実させていきたいと考えています。また、患者さまやご家族さまに対するよりきめ細かなサービスを提供させていただけるよう、病院の窓口となる「病院医療相談部」の利便性もより高めてまいります。さらに、高槻市医師会のご指導を頂きながら「地域連携パス」のシステムをさらに拡大、推進させ、患者さまが医療機関を移られても治療が切れ目なく受けられるシステムをより発展させていけるよう尽力してまいりたいと考えています。

地域の医療機関の皆さま方と手を携えて、患者さまが本院で治療を受けられたことを心から喜んでいただけるよう、本院職員一同は日々研鑽を積み努力してまいる所存でございます。今後とも御指導の程、何卒よろしくお願い申し上げます。

新任のご挨拶 ● 耳鼻咽喉科 ● 一般・乳腺・内分泌外科 ● 循環器内科



耳鼻咽喉科 科長
河田 了 (かわたりょう)

平成22年2月1日付で、竹中洋教授の後任として、大阪医科大学耳鼻咽喉科学教室の第5代教授を拝命いたしました。80年を超える歴史と伝統を有しております教室を主宰させて頂くにあたり、その重責を痛感いたしております。

さて当科は以前より病診連携には力をいれており、現在の医療連携室が生まれたときから、積極的に活動して参りました。例えば、今では当たり前になったFAX予約ですが、当院では当科がいち早く導入いたしました。今後病診連携はさらに進化していくものと思われませんが、アナログからデジタルへ、一方向性から双方向性へ変革していく必要性を感じております。当院が全国に先駆けて行うような、先進的な病診連携のアイデアを出し、参画したいと考えております。

耳鼻咽喉科の守備範囲をみたととき、耳領域、鼻領域、口腔・咽頭領域、喉頭領域までは、「耳鼻咽喉科」の文字が入っており、一般の先生方にも正しい認識をして頂いていると思います。めまい疾患や顔面神経麻痺などを対象とした平衡・神経領域も我々の守備範囲です。さらに私が専門としております頭頸部腫瘍領域も大きな分野であり、「耳鼻咽喉科・頭頸部外科」という呼称もようやく一般の方々にも認知されて参りました。すなわち、鎖骨より上部で脳と眼を除いた領域の外科と解釈されます。大学附属病院という特殊性もあり、入院患者の半数以上が頭頸部癌などの頭頸部腫瘍疾患です。高槻、茨木からのみならず最近では全国から症例を御紹介頂き大変ありがたく思っております。詳細につきましては、当科HPを御参照頂ければ幸いです。

当科ではすべての耳鼻咽喉科疾患に対応できる体制をベースとして、それぞれの分野で高度な医療を提供できるように努力いたしております。適応症例がございましたら、是非御紹介頂きたく存じます。今後の御支援、御指導を何卒よろしくお願い申し上げます。

●専門分野／頭頸部腫瘍

- 資格／日本耳鼻咽喉科学会専門医
日本気管・食道科学会専門医
日本がん治療認定医機構がん治療認定医
日本がん治療認定医機構暫定教育医
日本頭頸部外科学会頭頸部癌専門医制度暫定指導医

●略歴

- 昭和 59年 3月 大阪医科大学卒業
- 昭和 59年 5月 京都府立医科大学附属病院研修医
- 平成 元年 3月 京都府立医科大学大学院修了(医学博士)
- 平成 5年 9月 米国UCLA留学
- 平成 8年 7月 京都府立医科大学耳鼻咽喉科講師
- 平成 9年 7月 京都第一赤十字病院耳鼻咽喉科副部長
- 平成 11年 9月 大阪医科大学耳鼻咽喉科講師
- 平成 12年 7月 大阪医科大学耳鼻咽喉科助教授
- 平成 22年 2月 大阪医科大学耳鼻咽喉科教授



一般・乳腺・内分泌外科 科長
平松 昌子 (ひらまつ まさこ)

一般外科領域で取り扱う疾患は頸部から四肢末梢まで多岐にわたります。腹壁・肩胛ヘルニアや体表の腫瘍、腹腔内・後腹膜腫瘍など、消化器由来以外の腫瘍性・炎症性の外科的疾患を幅広く取り扱います。診断が困難な症例や原発部位不明の疾患なども、ご相談いただけます。

ただければ他科と連携しながら診断・治療にあたらせていただきます。血管外科は現在が主として静脈疾患を扱っており、下肢静脈瘤の硬化療法を中心にしています。

乳腺外科では主に乳癌の治療にあっていますが、食生活の欧米化などに伴い最近乳癌は増加の一途をたどっています。診断はマンモグラフィとエコー、針生検による穿刺細胞診に加え、マンモトーム生検も導入しています。マンモグラフィ撮影時には認定資格を持った技師が撮影にあたり、読影・診断も有資格医師が行います。手術は約8割が乳房温存手術で、腫瘍サイズの大きな症例に対しても術前全身療法を併用して腫瘍を縮小させることによりできるだけ乳房を温存するようにしています。腋窩リンパ節はセンチネル生検を行い、転移のあった症例にのみ郭清を行います。旧来のようなリンパ浮腫や機能障害をきたす症例はほぼ皆無です。さらに希望される方には形成外科と協力して乳房再建術も行っています。進行癌に対してはガイドラインに沿った術後化学療法やホルモン療法を行いますが、ほとんどのケースで通院治療が可能で、化学療法センターでの厳重な管理のもとに、患者さんにはゆったりとした環境で安全に治療を受けていただけるよう配慮しています。

●専門分野／食道疾患、GIST、腹部救急疾患、一般外科全般

- 資格／外科専門医・指導医、消化器外科専門医、消化器内視鏡専門医、食道科認定医、がん治療認定医・暫定教育医、消化器がん外科治療認定医、Infection Control Doctor

●略歴

- 1984年 大阪医科大学卒業
- 1994年 ワシントン大学(セントルイス)救急外科
- 1998年 大阪医科大学 一般・消化器外科 助手
- 2001年 大阪医科大学 一般・消化器外科 講師

●特技・趣味／旅行・愛犬と遊ぶこと



循環器内科 科長
石坂 信和 (いしがかのぶかず)

心筋梗塞、脳血管障害などの心血管疾患はADL低下の大きな要因であり、ときに致死的な転帰をたどることは周知のとおりです。動脈硬化は、加齢とともに進行する病態であることから、高齢化が到来した現代社会においては、循環器医の背負う責任はますます増大しているといえます。

高血圧や脂質異常症に対するより強力な薬物療法、心臓超音波や冠動脈CTなどの診断法や冠動脈インターベンション、不整脈のアブレーションなどの非薬物療法の登場により、この20~30年で循環器診療は、めざましい進歩をとげ、わたしたちは幸いなことに、予防、診断、治療のすべての面にわたって新しい有望なツールを手に入れました。しかし、個々のドクターには、それを適切に使いこなすための高度の知識、技術、そして経験が必要とされており、それは一朝一夕で習得できることではありません。知識、技術のUpdateをおこたらず、統合的に判断し治療できる循環器医療を構築すべく、日々、努力を重ねて参りたいと考えております。今後ともご指導、ご支援を賜れば幸いと存じます。

●専門分野／循環器内科学

- 資格／日本内科学会 認定内科医
日本内科学会認定 総合内科専門医
循環器専門医、日本動脈硬化学会 評議員、日本高血圧学会 評議員、日本心臓病学会 FJCC

●略歴

- 昭和 61年 3月 東京大学医学部医学科卒業
- 平成 7年 米国アトランタエモリー大学循環器科に留学
- 平成 12年 東京大学医学部 助手
- 平成 20年 7月 東京大学医学部 講師
- 平成 22年 4月 大阪医科大学 内科学第III教授、循環器内科 科長

●特技・趣味／音楽鑑賞



「女性のトータルサポート」を目指した きめ細かい最新医療の提供を心がけております。

婦人科・腫瘍科 科長

大道 正英

当科では、外来患者数は1日平均120名で、初診、腫瘍専門外来のほか、内視鏡外来、子宮筋腫、子宮内膜症、子宮頸癌術後、子宮体癌術後、卵巣癌術後、子宮鏡、中高年女性予防医学・骨盤再建外科などの各専門外来できめ細かい対応を行っています。当科の特徴は婦人科腫瘍症例が多いことであり、後述いたします「女性のトータルサポート」に基づくきめ細かい最新の医療の提供を心がけております。

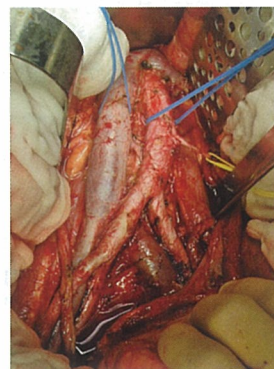
婦人科癌は、年間約300例の手術を行っています。特に最も予後が悪い卵巣癌の治療に力を入れ治癒率アップに努めております。具体的には、EBMに基づいた治療をめざし、卵巣癌での根治手術では傍大動脈リンパ節郭清を左腎静脈分岐部までを十分に行い、適切な診断のもとで、その後の抗癌化学療法に結びつく集学的治療を行っています。子宮頸癌に関しては、子宮頸部前癌～初期癌のレーザー円錐切除術を全国に先がけて開始し、約30年間で3000例以上を治療し、98-99%の治療効果を挙げています。また、初期浸潤癌では、適応は限られますが腹腔鏡下子宮全摘術や若年子宮頸癌症例に対する広汎子宮頸部摘出術を行っています。さらに最近話題になっております子宮頸癌予防ワクチンを予約制ですが始めました。子宮体癌では、進行癌における積極的な拡大手術はもちろんのこと、子宮鏡検査、黄体ホルモン療法を含めた初期体癌の治療を積極的に行っております。今後は、初期子宮体癌におきましても腹腔鏡下手術を取り入れていく予定にしております。さらに、抗がん化学療法は、当大学付属病院の外来化学療法センターを積極的に使用し、抗癌化学療法を受けられる患者様の安全とQOLの向上に努めております。

当科では1984年頃より子宮内膜症などに対する癒着剥離術などの腹腔鏡下手術をはじめ、1991年よりは子宮外妊娠、卵巣嚢腫および子宮筋腫などの疾患の範囲を広げて、現在、婦人科良性疾患(悪性は除く)に行う手術の約90%以上、約200例を腹腔鏡手術で行う

ようにまでなりました。我々の教室では、3名の腹腔鏡技術認定医を含め9名の腹腔鏡グループによるチーム医療を行っています。近隣の医院・病院から大変多くの腹腔鏡下手術希望の患者様をご紹介いただいております。

中高年女性に対する医療は、「女性のトータルサポートをめざして」のまさに重要な柱の一つの分野であると考えております。中高年女性の悩みはもちろんのこと、婦人科癌患者の治療前後における更年期症状をはじめ、骨量減少、コレステロール値上昇、動脈硬化に対し、腰椎、橈骨での骨密度測定による骨塩定量、超音波による血管内皮機能の測定、脈波伝播速度(PWV)測定による動脈硬化の早期発見などに重点を置き、閉経後女性の諸症状およびリスクに応じ、ホルモン補充療法(HRT)、低用量HRT、ラロキシフェン、ビスフォスフォネイト、スタチン(HMG-CoA還元酵素阻害剤)などを使い分けるテーラーメイド医療を実践しております。さらに、骨盤底外来を開設し、排尿障害、尿失禁、性器脱などに対する管理治療方法のアルゴリズムを作成し、Tension-free Vaginal Mesh (TVM)手術など低侵襲・低再発の新しい術式の導入も図りながら、個々の患者様にあつた治療管理指針の作成に努めております。

以上婦人科・腫瘍科の専門分野への取り組みについて簡単にご説明させていただきました。外来受診はできるだけ専門性のある外来担当医による診察を受けていただきますように医療連携室を通じた予約を取っていただきますようお願い申し上げます。



診療科の紹介 ● 産科・内分泌科



産科・内分泌科 科長
亀谷 英輝

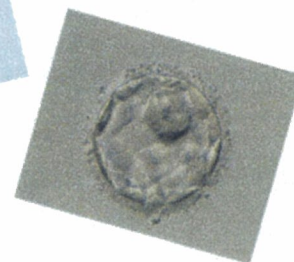
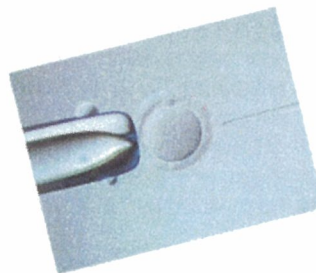
産科・内分泌科は女性の生涯サポートを行う産婦人科医療のなかで、妊娠・分娩に関するあらゆる疾患を扱う周産期分野と、不妊症に代表される生殖機能と思春期から更年期まで女性ホルモンに関わる疾患を扱う生殖内分泌分野を担当します。当科にご紹介頂いた患者様は、初診（三診）担当医の判断により次回から必要に応じた各専門外来で診療を受けていただきます。月経異常や排卵障害などは内分泌専門医が担当し、受精から妊娠成立にかけては不妊症外来がサポートいたします。さらに流産を繰り返してしまう不育症の方には不育症専門医が担当します。正常妊娠は自然分娩を推奨し、分娩までの通常の妊娠管理は一般産科外来で行います。また不妊症・不育症などの治療で手術を要する場合は、可能な限り腹腔鏡・子宮鏡などを用いた内視鏡手術を行い、体に負担の少ない治療を目指します。

当科が診療の対象とする主な疾患とその症状

- **月経の異常**
卵巣機能不全（月経不順・無月経）、多嚢胞性卵巣など
- **挙児希望であるがなかなか妊娠しない**
不妊症
- **妊娠しても流産を繰り返す**
不育症・習慣流産
- **月経が遅れた、妊娠反応検査薬で陽性反応が出た**
正常妊娠、子宮外妊娠
- **合併症妊娠**
内科疾患合併（糖尿病、高血圧、甲状腺疾患、膠原病など）
婦人科疾患合併（子宮筋腫など）
- **妊娠中の母体異常**
切迫流産、切迫早産、妊娠高血圧症、妊娠糖尿病、
前期破水、前置胎盤など
- **妊娠中の胎児異常**
子宮内胎児発育遅延、胎児病、多胎妊娠、
双胎間輸血症候群、骨盤位など
- **分娩時の異常**
微弱陣痛、回旋異常、癒着胎盤、弛緩出血など
- **閉経前後の異常**
更年期障害、骨粗鬆症、高脂血症など

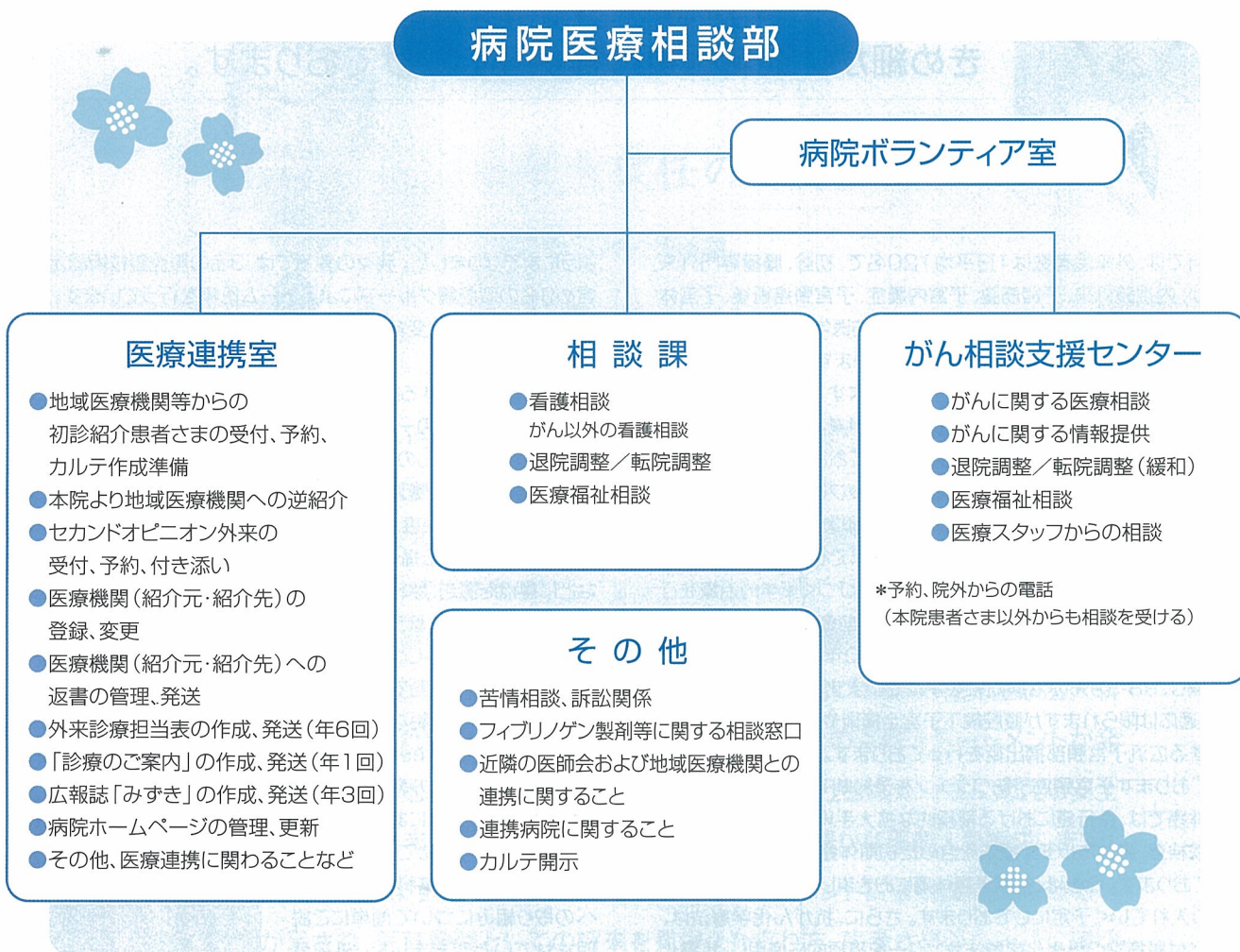
分娩は正常経過であっても何時急変するか判らず、一旦病的状態に陥ると、母と子の二つの命を危険にさらすという特殊性を持っています。私たちはこの二つの命を守るために、NICU（新生児集中治療室）スタッフと常に連携をたもちながら、日頃から訓練されたチームワーク医療を行っております。近年日本では少子高齢化と産科医の減少による劣悪な周産期医療環境が社会問題となっています。当科では複数の専門医とスタッフを常に充実させ、緊急搬送の24時間受け入れ体制により患者様へは他に抜きん出た質の高く安心した医療環境を提供することが私どもの使命であると考えております。産科救急搬送の受け入れ数は大阪府下1～2位（大学病院では全国1位）です。また、生育可能な妊娠22週以降の分娩すべてに対応しております。

生殖内分泌分野では、一般不妊治療や生殖補助医療だけでなく、腹腔鏡手術による子宮内膜症や子宮筋腫などの治療も積極的に行い、また産科チームと連携し、妊娠そして出産までのトータルサポートを行っています。



医療連携室から

病院医療相談部は現在19名で業務を行っています。組織図を紹介しながらそれぞれの役割についてご案内したいと思います。



編集後記

初めに今号の発行が遅れましたことを深くお詫び申し上げます。

本格的な夏を迎え、皆様いかがお過ごしでしょうか?本院は6月末の3日間に日本医療機能評価機構の「病院機能評価Ver6.0(更新)」を受審いたしました。「認定証」が届くかどうか、後はサバイヤーの方々との判断に委ねるだけです。

ご報告が遅くなりましたが、4月より循環器内科、耳鼻咽喉科が新たな体制でスタートしております。以前から2科体制で運用してまいりました循環器内科が、新任の第三内科教授 石坂信和先生を診療科長にお迎えして一本化されました。また、耳鼻咽喉科におきましては前准教授の河田先生が新たに耳鼻咽喉科教授となられ、診療科長として体制を牽引されています。何時も考えることですが、新たな人材を迎えることが出来ることは組織にとって最も素晴らしいことです。新しくお迎えした先生方が本院にとっても、地域の医療機関の方々にとっても充実した医療提供の一助になることは間違いありません。また、病院医療相談部も木下光雄先生が病院長に就任されたことを受けて、新たに樋口和秀先生(第二内科教授・消化器内科科長)を部長に迎えました。新体制で、益々地域医療の発展に尽力したいと考えております。

(T.S)